



シュラーガーSchlagerについて： 民謡との関連において

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-06-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂西, 八郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3333

シュラーガー Schlager¹⁾ について

— 民謡との関連において —

坂西 八郎

Über Schlager in Deutschland

Hachiro Sakanishi

目 次

I. 歌唱の現実	168
II. シュラーガーの基本的な性格とその基盤(歌詞よりの考察)	178
III. 結び——シュラーガー研究の現状	192

Zusammenfassung

Wie im dritten Teil des Aufsatzes erwähnt wurde, ist die Geschichte einer germanistischen volkskundlichen Forschung über den deutschen Schlager noch sehr jung. Die Forschung hat in neuerer Zeit den ersten Anstoß durch einen kleinen Aufsatz von H. Bausinger bekommen, der 1956 im Jahrbuch des österreichischen Volksliedwerkes erschien. Dieser Aufsatz hat auch heute noch wegweisenden Wert. Seither sind nur vereinzelte Arbeiten herausgegeben.

Aber die Betrachtungsweise, worauf eine Reihe dieser Forschung beruht, scheint uns insofern qualitativ fortgeschrittener als die der früheren, als man versucht, mehr oder weniger Sänger und Zuhörer als eine soziale Schicht in Betracht zu ziehen. Im Gegensatz zu der bisherigen Volksliedforschung bis J. Meier, die vorwiegend philologisch eingestellt war, bewirkte die Entwicklung der Volkskunde in der Nachkriegszeit eine neue Methode der Volksliedbetrachtung. Von einigen modernen Versuchen beeinflusst, das Lied nuter einem erweiterten bzw. spezifisch verschärften Begriff z.B. als Gruppenlied, Volksgesang od. Modelied zu erfassen, entsteht auch hier eine kleine Arbeit, deren Hauptaufgabe darin besteht, den Schlager in seinen vielseitigen Erscheinungen zu betrachten.

Im folgenden legen wir die statistischen Tatsachen zugrunde, die in den 50er u. 60er Jahren nur bruchstückweise in Deutschland erschienen und dann hier in Japan vom Verfasser gesammelt und bearbeitet wurden. Daraus kann man den Prozenstatz des Schlagers unter den von Jungen und Mädchen gesungenen

Liedern feststellen und Schlüsse ziehen auf die kulturellen Tendenzen der heutigen Zeit im Bereich der Musik. Weiterhin werden die Eigenschaften des Schlagers und die sozialen und kulturellen Gründe für die Blüte desselben in der Gegenwart erklärt.

Zu erwähnen wäre noch, daß bei der Erörterung der spezifischen Eigenschaften der Schlagertexte die ästhetischen Anschauung Hegels, die mich seitlangem beeinflusst haben, auftauchen.

Zum Schluss wird über die gegenwärtige Forschungslage des Schlagers in Deutschland berichtet, die bereits am Anfang dieser Zusammenfassung gesagt ist.

* * *

Die Tatsache, daß der Verfasser diese Forschung nicht in Deutschland betrieb, hat den Nachteil, daß das Problem allzusehr vereinfacht sein mag. Andererseits aber hat es den Vorteil, daß von manchem Unwesentlichen abgesehen, und das Schwergewicht auf das, was uns am wesentlichsten zu sein scheint, gelegt wird.

I. 歌唱の現実

古い民謡 älteres Volkslied (1600年以前——定説ではない) や、新しい民謡 neueres Volkslied を土壌とする、民謡風歌曲 volkstümliches Lied ; Lied im Volkston の発生・発展の圏外に、最底辺の民衆の歌謡の一つとして巷間に歌われてはいたが、19世紀末期以降の資本主義的産業社会の発展とともに、はじめて支配的な勢力として民衆の芸術的要求をみたすようになった歌謡の一つにシュラーガー Schlager²⁾がある。そしてそれは、民謡や民謡風歌曲の果すべき役割にとってかわったかのようにみえる。民謡や民謡風歌曲は、「次第にシュラーガーによって押しのけられる。そしてシュラーガーは、高い芸術 Hochkunst と民衆の欲求 Volksbedürfnis との間に存在する間隙に、どうにか橋を渡す³⁾」ようになると認められていく。

では、このシュラーガーは、現在どの程度に歌われているのか、われわれは数例の調査結果を検討しつつ、考察を試みたい。(ここに用いる資料は、前時代の影響の少ない青少年層を対象とした調査資料に限定する。)

× × ×

なお、シュラーガーの概念は、論争途上にあつて確定していない。へ

ルマン・プファウツ (Hermann Pfautz)⁴⁾は、本稿のために現在の最も常識的な概念現定を提供してくれたのでここに提示しよう。

Schlager: Neuzeitliches Großstadtlid, durch Rundfunk u. Tonfilm aber allgemein verbreitet, Nachfolger von Singspiel— u. Kabarettlid, sentimental oder kummervoll, meistens primitiv u. billig seltner witzig u. spritzig. Im Gegensatz zum Volkslied nicht gewachsen, nur kurzlebig, auf den Ungeist der Massenzivilisation und Konsumation spekulierend. (Hermann Pfautz)

其の I.

(a) ヘルマン・バウズィンガー (Hermann Bausinger) はその論文『民謡とシュラーガー』(«Volkslied und Schlager»)⁵⁾において、一女教師がある典型的な都市の学校において行なったという調査、6歳の男女学童が記憶し、歌っている歌に関する調査⁶⁾を、報告している。その調査によれば、結果は次のとおりである(第一表)。

第一表

(イ) 民謡風歌曲 Volkstümliches Lied	32%
(ロ) シュラーガー Schlager	21%
(ハ) クリスマスの歌など Weihnachts und Abendslieder	16%
(ニ) 其 他	31%

この結果につけ加えられた女教師の備考を H. バウズィンガーは紹介しているが、非常に興味深い。すなわち、調査対象となった子供達の多くが、歌詞の最後まできちんと歌うことができると同時に、作詞・作曲者の名前が明らかかな場合にはそれをよく知っており、さらに部分的には子供達自身の歌に歌いかえ Zersingen, Umsingen をして歌っていることであった。

(b) H. バウズィンガーは、同論文において、カール・アイヒェレ (Karl Aichele) とクルト・グラーフ (Kurt Graf) の共同調査、『1950年以降の、レムスタールにおける歌謡の状況』(«Bestandsaufnahme über das Liedgut im Remstal ab 1950»)⁷⁾の内容を簡単に説明している。K. グラーフは、子供達

が学校の小遠足などであまりに多くシュラーガーや流行歌 Gassenlied を歌うのを聞いて調査にのりだした。その調査では、都市と農村、男子学童と女子学童などの項目を設けて分析しているが、そこに共通する点を見ると、学校で用いる教材に含まれる民謡や民謡風歌曲を除けば、すべての分類項目を通じて、シュラーガーの歌われる比率が第1位を占めていることと、子供に適した歌いかえ Zersingen, Umsingen の現象が存在することであった。

(以上 (a), (b) は、1950 年代前半における調査である。)

其の II.

(a) パウエ・フォークト (Paue Vogt)⁸⁾ はその論文『中級学校の音楽教育におけるジャズ』(«Der Jazz im Musikunterricht der Höheren Schule») において、次の調査結果(第二表一表の作成は本稿の筆者による)を報告している。この調査は、中都市の男子中級学校における、全学年に対するアンケート調査である。調査の方法は、被調査者が、一定の短時間内に自分の知っている歌の題名を記入していくというものである。

第二表

	生徒数	ジャズ	シュラーガー	民謡	計(2)	歌の数 生徒数
下級	116	13 (2.4)	297 (53.7)	243 (43.9)	553 (100.0)	4.8
中級	110	59 (7.7)	483 (61.5)	248 (31.6)	785 (100.0)	7.1
上級	48	85 (21.4)	165 (41.6)	147 (37.0)	397 (100.0)	8.2
計(1)	274	157 (9.0)	945 (54.3)	638 (35.5)	1,740 (100.0)	6.2

第二表に関する備考。(イ) Musikalische Zeitfragen. VII. Das Volkslied Heute, Kassel 1956 S. 67 の数字を基礎として P. フォークトの報告を補充した。

(ロ) 括弧内の数字、計(2)、歌の数/生徒数は本稿の筆者による。

(ハ) 括弧内の数字は、計(2)に対する百分率を示す。

この表によれば、すべての学年を通じてシュラーガーの占める比率が最高である。下級では 53.7%、中級では 61.5%、上級では 41.6% であり、平均すれば 54.3% となっている。

全体の中でジャズの占める比率は9%と僅少であるが、その内容は、下級では2.4%、中級では7.7%、上級では21.4%と増加している。その増加は、生徒数が少なく、調査の信憑性に問題が生ずる恐れもあるが、とにかく急激である。

逆に、民謡の占める比率は、全体の中では35.5%と、シュラーガーにくらべても、ジャズの急激な増加の方向を想定した場合にくらべても低く、その内容は、下級では43.9%、中級では31.6%、上級では37.0%と、学年による大きな変化はみられない。

一人の生徒が知っている歌の数は、下級では4.8、中級では7.1、上級では8.2と、下級から上級にかけてほぼ2倍になる。

各級における、ジャズ、シュラーガー、民謡の内容に立ち入ることはここでは省略しよう。しかし、P. フォークトの民謡 Volkslied の意味するものと、生徒のその意味するものの特質について触れておくことにしよう。

P. フォークトは、この調査における民謡の中から頻度の高いもの10編(曲)⁹⁾を挙げている(第三表)。

第三表

1. Am Brunnen vor dem Tore	154
2. Das Wandern ist das Müllers Lust	96
3. Hänschen klein	94
4. Ein Jäger aus Kurpfalz	70
5. Sah ein Knab ein Röslein stehen	68
6. Im Wiesengrunde	61
7. Deutschland, Deutschland über alles	42
8. O Schwarzwald, o Heimat	39
9. Der Mai ist gekommen	33
10. Alle meine Entchen	30

第三表に関する備考。右端の数字は頻出数である。

この10編(曲)の民謡の内容は、das echte Volkslied か、芸術歌曲 das Kunstlied か、民謡風歌曲 das volkstümliche Lied かという問題を含んでいる。P. フォークトや生徒達の民謡概念、少なくとももここで P. フォークトが

「民謡」としているものの概念は、極めて広義¹⁰⁾であって、民衆に親しまれている芸術歌曲という程度のものである。ジョン・マイヤー (John Meier) の受容説 Rezeptionstheorie の根拠も、芸術歌曲が民謡化してゆく状況にあるのであって、民謡概念が広義化してゆくのも仕方ないであろう。

(b) H. プファウツは、1958年にP. フォークトと同じ条件のもとに、異なる方法によって調査を行なった。H. プファウツは、「私の民謡に対する態度」(Meine Einstellung zum Volkslied) という題を全生徒に与えて文章を書かせたのであるが、その結果は次のごとく(第四表一表の作成は、本稿の筆者による) になった。

第四表

文章内容	ク ラ ス						計(2)
	IV.	U.III.	O.III.	U.II.	O.II.	U.I.	
① 民謡への一義的賛成	10 (55.6)	16 (47.0)	28 (48.2)	15 (31.9)	16 (30.1)	13 (52.0)	98 (41.7)
② 民謡, ジャズ, シュレーガーに同じ気持をもつ	7 (38.6)	10 (28.1)	18 (31.0)	21 (44.7)	20 (37.7)	7 (28.0)	83 (33.3)
③ 民謡を否定し, シュレーガー, ジャズを好む	1 (5.6)	8 (23.5)	12 (20.7)	11 (23.4)	17 (32.0)	5 (20.0)	54 (23.0)
計(1)	18 (100.0)	34 (100.0)	58 (100.0)	47 (100.0)	53 (100.0)	25 (100.0)	235 (100.0)

第四表に関する備考。(イ) Musikalische Zeitfragen. VII. Das Volkslied Heute, S. 69の数字を基礎として、H. プファウツの報告を補充した。

(ロ) 括弧内の数字は、本稿の筆者による。

(ハ) 括弧内の数字は計(1)に対する百分率である。

(ニ) クラスは左より右へ、下級より上級に並ぶものとする。IV. は12歳、U.I. は17歳¹²⁾。

この表によれば、全体として①民謡への一義的賛成の比率が高く、41.7%となっている。

U.II., O.II.を除いて、全学年を通じ①>②>③の順序に変わりはない。U.II., O.II.では①<②となっている。

①における、下級より上級に至る趨勢をみると、55.6%から次第に下降し、O.II.で30.1%となり、U.I.で52.0%と急に上昇するのであるが、一義的賛成の内容が、高学年のためもあり、質的に変化するものと推定される

が、当面確認できないのは残念である。

② 民謡、ジャズ、シュラーガーに対して同じ気持をもっているものは、全体的には 33.3% であるが、U.II. で 44.7% と増加しているのは、①からの移動が多いためとみなされる。

③ 民謡を否定し、シュラーガー、ジャズを好む傾向は、上級になるに従って次第に増加するのであるが、U.I. に至り僅かに減少している。

U.II., O.II. すなわち中級から上級にかけてのクラスでは、①, ②, ③の数字の趨勢に、いろいろな意味で変化が生ずる。ここでは、恐らく、民謡、シュラーガー、ジャズの把握の上で質的な変化が起こるのであろう。従って、①, VI. の 55.6% と U.I. の 52.0% はともに平均を上まわるが、民謡把握の内容は異なるであろう。③, U.III. から O.II. までは概して高いパーセンテージを示すが、U.I. では下降している。それは、①に移動したとみなされるものの残りで、根強いジャズ支持者の固定数を示すともみなされるのである。

H. プファウツは、以上の文章による態度の表明による調査とともに、単に何を好むか、という調査を行なった。文章による調査が、一定の理解のレベルにおける調査であるのに対して、後者では、いわば感覚のレベルにおける

第五表

好みの内容	ク ラ ス				計 (2)
	IV.	O.III.	U.I.	O.I.	
① 民謡を好む	115 (43.3)	114 (39.9)	72 (41.6)	33 (26.6)	334 (39.2)
② シュラーガーを好む	88 (32.9)	82 (28.8)	47 (27.1)	37 (29.8)	254 (29.8)
③ ジャズを好む	60 (22.8)	95 (32.6)	54 (31.2)	54 (43.5)	263 (30.8)
計 (1)	263 (100.0)	291 (100.0)	173 (100.0)	124 (100.0)	851 (100.0)

第五表に関する備考。(イ) Musikalische Zeitrigen. VII. Das Valkslied Heute, 1955, S. 69 の数字を基礎として、H. プファウツ報告を補充した。

- (ロ) 括弧内の数字は、本稿の筆者による。
- (ハ) 括弧内の数字は、計(1)に対する百分率を示す。
- (ニ) クラスは、第四表と同じ。

調査である。それは次のごときもの（第五表—表の作成は、本稿の筆者による）となったが、これは第四表と比較すると興味深い。

この表によれば、全体として、① 民謡を好むものが 39.2% であり、最も多い。しかし、IV., ①>②>③ である好みの趨勢は、O.I., ①<②<③ と逆転しているのを見ることができる。

第四表において、民謡への一義的賛成が高学年 U.I. で 52.0%、民謡を否定して、ジャズ、シュラーガーを好むもの 20.0% であったのに対して、第五表においては、民謡を好むもの 41.6%、シュラーガーを好むものとジャズを好むものの合計 58.3% となる。文章表現による態度の表明と、単に好みを表明する場合では、数字に示された結果は逆である。これは、理解の上では民謡の文化的重要性を認識し、感覚の上ではジャズやシュラーガーを好むという実情を反映しているものと考えられる。第五表の、ジャズ、シュラーガーを好むものの合計は、さらに高学年 O.I. となると、73.3% となり、それに対し民謡を好むものは 26.6% と減少が甚だしい。これは、理解と感覚上の好みの差がさらに開くことを裏づけるものである。

H. プファウツの場合も、その民謡概念は、P. フォークトの場合と同じく、極めて広義である。

H. プファウツは第四表に示される民謡を好むものの内容を分析するための調査も行なっている。その一つとして、約 800 人の生徒を対象に、自分で歌うことのできる民謡及び単に知っている民謡に記号を付させるアンケート調査を行なった¹³⁾。その結果次のごとき数字を得ることができた（第六表）。

H. プファウツは、なるべく教材そのものに採りあげられなかった民謡を意識的に調査に用いた。上掲の民謡のうち、頻出度の高いものには、①, ③, ④, ⑥, ⑦ など、傾向として社交歌 *Gesellschaftslied* が多く、メロディーの上でも、まず舞踏の伴奏曲としても用いられ易く¹⁴⁾、シュラーガー風に変曲し易いもの¹⁵⁾ が多いのがわかるであろう。極論すれば、現代では、広義の民謡もシュラーガーへの流動現象を示しているとみなされる¹⁶⁾。

（以上 (a), (b) は、1950 年代後半における調査である。）

第六表

1. Auf, auf, zum fröhlichen Tagen	603
2. Im schönsten Wiesengrunde	578
3. Jetzt fahren wir übern See	493
4. Heiße Kathreinerle	464
5. Es freit ein wilder Wassermann	424
6. Jetzt gang i ans Brünnele	370
7. Rosestock, Holderblüh	279
8. Innsbrück, ich muß dich lassen	266
9. Weiß mir ein Blümlein blaue	245
10. Scheint die helle Sonne	226
11. Freude, laß uns fröhlich loben	187
12. Wer sich die Musik erkliest	71
13. Es führt über den Main	54
14. Fein sein, beinander bleibn	32
15. Drei Lauf auf einer Linden	19
16. Mir ist ein feiner braues Maidelein	14
17. Fliegt der erste Morgenstrahl	11
18. Freut euch ihr Schäferlust	10
19. Wollt ihr hören nun mein Lied	5
20. Es hütet ein Schäfer im hohen Holz	3

第六表に関する備考。右端の数字は頻出数である。

其の III.

(a) フリッツ・ボーゼ (Fritz Bose) は、その論文『民謡—シュラーガー—フォークロル』(《Volklied-Schlager-Folklore》¹⁷⁾) において報告している。それによれば、ベルリン西ドイツ地区 (Westberliner Bezirk) の教育大学の学生を対象に行なったアンケート調査の結果、その学生間には、学校教育に培われた古い民謡 älteres Volklied が最も多く歌われ、ついで民謡の一種である社交歌とシュラーガーが最も多く歌われていることが判明した。しかし、内容では、年齢が高まるにつれて、シュラーガーの比率が高まるということも明らかとなった。

(b) ヘルマン・フィッシャー (Hermann Fischer) は、『民謡, シュラーガー—, エヴァーグリーン』(《Volklied, Schlager, Evergreen》, Tübingen 1965.)

において、1964年にニュルトリンゲン (Nürtingen) の5学校 (但し小・中合同学校 Volks-Mittelschule) で行なった、生徒の歌の好みの調査を報告している¹⁸⁾が、79.3%がシュラーガーを好むと述べている。

(以上の(a), (b)は、1960年代の調査である。)

さて、われわれは、以上にみた**其の I. (a), (b); 其の II. (a), (b); 其の III. (a), (b)**に、シュラーガーが歌われている現実をかき間みることができた。ここから、われわれは大体の趨勢を把握することができるであろう。

(イ) 20歳以下の青少年層には、積極的に歌唱することはないにしても、聴いて楽しむ程度の民謡愛好者は、ほぼ30%は存在する。高学年になるに従って、民謡の意義の理解は行きわたり深まるが、好みそのものは離れて行く。

(ロ) 実際にこの層で歌われ (又はギター-其他の普及により) 演奏される歌の50%以上は、シュラーガーであると考えられる。

(ハ) この層には、20%以上のジャズの愛好者 ((イ)の意味の) が存在する。

(ニ) 民謡概念は一極に極めて広義である。民謡とシュラーガーの境界は、子供の歌いかえ、演奏上の転用などによりぼける可能性がある。

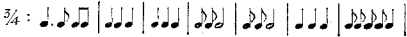
さて、以上にわれわれは、シュラーガーの歌われている現実に関し、民謡との関連において若干の考察を行なった。何が歌われているか、全面的な調査というものは存在しないので、個々の研究者の調査を組みたてて、そこから全体的な姿を想定せざるを得ないのである。1950年、60年代のシュラーガーの歌われている現実をわれわれは非常に少ない資料からではあるが知り得たと思う。

註) I.

- 1) Schlager の適切な日本語訳は当面考えられないので、「シュラーガー」とした。本稿では、同様に適訳のないものがあり、folklore は「フォークロル」、evergreen は「エヴァーグリーン」とした。
- 2) 『クルーゲ語源辞典』(Kluge, 《Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache》, 20. Aufl. 1967)によれば、この言葉は1881年ウィーンの『国民新聞』(《National Zeitung》, 34526)にはじめて出現した言葉である。その新聞には、「人を

興奮させるメロディー——これをウィーンのは、Schlager となづけた」とある。

- 3) アレクザンダー・フォン・グライヒェンールスヴールム (Alexander von Gleichen-Rußwurm): 『諸国民文化—風俗史』 (Bd. 23 «der Kultur-und Sittengeschichte aller Zeiten und Völker», Wien-Hamburg-Zürich, o. J.) S. 532.
- 4) H. プファウツは 8) 参照。
- 5) 『オーストリア民謡研究年報, 第 5 巻』 («Jahrbuch das Österreichischen Volksliedwerkes, Bd. 5», Wien 1956) S. 61.
- 6) H. バウズインガーは、数年前に行なった調査と述べている。1950~1953 年に行なわれたこの調査は、『両親と学校』 («Eltern und Schule», Stuttgart 1953) S. 91 に報告されている。
- 7) H. バウズインガーは、この調査結果を「ヴィッテンブルク民俗学研究所」から借用したと述べている。
- 8) P. フォークトは、フライブルク (Freiburg) のケプラー・ギムナージウム (Kepler-Gymnasium) の教師であり、この学校を調査場所を選んだ。P. フォークトの先任者である、H. プファウツは、1958 年カッセル (Kassel) で開催された民謡学会 (一後出) において、P. フォークトのこの論文を紹介した。本稿のこの部分はそれを用いている。H. プファウツの報告は、「中級学校における民謡」 (Das Volkslied in der höheren Schule) と題して、『現代の民謡』 («Das Volkslied Heute», Kassel 1959) S. 66-70 に掲載された。
- 9) 以上の 10 編 (曲) の民謡は、子供の歌 Kinderlied <③ Hänschen Klein> 並びに <⑩ Alle meine Entchen> を除いて、すべて第二次大戦前・後にそれぞれ最も普及した教科書、『戦友』 («Mein guthr Kamerad», II. 8. Aufl. Karlsruhe 1932) と『兄弟の歌手』 («Bruder Singer», Kassel 1958) に掲載されている。
- 10) 最も広義の民謡の定義の一例としては、W. シェーラー (W. Scherer), 『ドイツ文学史』 («Geschichte der deutschen Literatur», 1908) であると、原俊彦は指摘している。—原俊彦: 『民謡における流転と温存』 (京都府立医科大学人文系教室, «STUDIA HUMANA No. 1», Kyoto 1967) S. 76.
- 11) ジョン・マイアー (John Meier): 『民衆に歌われる芸術歌曲』 («Kunstlied im Volksmund», 1906).
- 12) 当ギムナージウムの学校編成は、下から上にかけて、VI., V., IV., U.III., O.III., U.II., O.II., U.I., O.I. の 9 クラスである。
- 13) H. プファウツは、『兄弟の歌手』 («Bruder Singer», Kassel 1958) から、20 編 (曲) を選び提示した。
 (イ) 現代の歌 (H. プファウツの本稿の筆者にあてた私信によれば、現存の作詞者並びに作曲家によるものを差す): ⑩, ⑬, ⑭, ⑰.
 (ロ) 古い民謡 (H. プファウツによれば 1750 年以前のもを指す): ⑧, ⑨, ⑬, ⑱.

- (ハ) バラーデ Ballade: ⑤, ⑯, ⑳.
 (ニ) 社交歌 Gesellschaftslied; geselliges Lied: ①, ③, ④, ⑥, ⑦.
 (ホ) 故郷の歌 Heimatlied: ②, ⑱, ㉑.
- 14) 例えば上掲 20 編 (曲) のうち, <⑦ Rosestock, Holderblüh> の拍子は,
 である。歌詞は愛の歌であるが、歌詞は生徒達に受け入れられず、ただ拍子のみが受入れられたと、H. プファルツは述べている。
- 15) 『民衆音楽誌』(《Volksmusik》, 2, 1967) S. 6. に、「シュラーガーに編曲された民謡」Zum Schlager verarbeitetes Volkslied に関し述べられている。また、有名な民謡「野バラ」(Heiden Röslein) から編曲されたシュラーガーもよく演奏される。
- 16) ヴァルター・ヴィオラ (Walter Wiola): 『民謡の衰微とその第二の存在』(《Der Untergang des Volksliedes und sein zweites Dasein》. In: Musikalische Zeitfragen VII, Das Volkslied Heute, Kassel 1959) S. 20 にこう述べられている。
 „Die neueren Gattungen des Liedes haben viel an Melodien, Typen, Floskeln und Stilen von Volkslied übernommen.“; „In fast allen heutigen Gattungen des Liedes lebt das Volkslied als Fragment weiter, ...“
 また、H. パウズインガー: 『民謡とシュラーガー』(《Volkslied und Schlager》, In: Jahrbuch des Österreichischen Volksliedwerkes, Bd. 5, 1956) S. 73 に
 „daß es Volkslieder gibt, die dem Schlager sehr nahekommen, ... daß es Schlager gibt, die durchaus auf dem Wege zum Volkslied sind.“ と述べられている。
- 17) ドイツ民俗学会編: 『民俗学雑誌』(《Zeitschrift für Volkskunde》, 63. Jahrg. 1967 I.) S. 42.
 18) Ebd. S. 38.

II. シュラーガーの基本的な性格とその基盤

(歌詞よりの考察)

現代のシュラーガーは、多分に娯楽産業発展の内的契機としての利潤の源泉をなしている¹⁾のであって、古い民謡と異なり、著作権 Urheberrecht 保護下²⁾に、間断なく新たに提供されている³⁾。今日では、マスメディアを媒介として歌が提供され、二・三週間後には既に姿を消し、また新しい歌が提供される、という現象は珍しいことではなくなった。歌の出現と消滅の周期は、ますます短期間化するという事態は、特に、アメリカ・日本・西ド

イツをはじめとする高度な資本主義国に顕著な共通現象である。

「それ（現代のシュラーガーが歌われている上記の状況を指す——本稿の筆者）は、産業社会 *industrielle Gesellschaft* においてはじめて可能になったのであり、その社会の発展とともに発展したのである。シュラーガーという種 *die Gattung* の歌は、現代娯楽産業 *die moderne Unterhaltungsindustrie* の保持する特殊性、大量化並びに急速伝達の技術的手段との関係において存在している」⁴⁾。

この事情は、シュラーガーの性格の一側面を規定せずにはおかないであろう⁵⁾。

シュラーガーには、民衆の生活と十分に融和し、民衆の芸術創造的な行為——芸術享受と結びついているが——の垣塙を通して、民衆の体熱を伴った芸術作品に醸成される、といったいとまは与えられないのである。民謡が本来 *langbleibig* な性格を賦与されているのに対して、シュラーガーは *kurzbleibig*⁶⁾ な生命しか賦与されていない。シュラーガーの存続する環境の上からも、それ自体の性格の上からもそうである。1960年代に大流行したシュラーガー、〈*Marmor, Stein und Eisen bricht*〉は、既に歴史的に古い存在となり、1950年代のシュラーガーともなれば、民謡研究における、中世の民謡、バラードなどに比肩し得る位置にあると主張する人もいる⁷⁾のである。

したがって、民謡の示すごとき、民衆間における歌の定着性というものは全く持ち得ない。また、民謡に摸して作詩作曲された、現代風な民謡風歌曲乃至シュラーガーも、*kurzbleibig* であることに変わりはない。ただ、民謡それ自体の諸要素が、シュラーガーと異なり、民衆間に定着しているのである⁸⁾。

さて、シュラーガーの内的性格よりする、*kurzbleibig* な特性は、芸術作品としての不完全さにも由来する。結論を先取りして述べるならば、シュラーガーは、民謡にくらべ、歌う主体の心情の顕現、歌詞にあって形象を構成する素材などが、必然性・客観性を帯びていない。あるいはまたその素材自体が欠除し、心情の表現は対象化されず、直接・無媒介になされることによ

て、歌の内容は極めて偶然性・主観性を帯びるのである。形象は普遍性を失い、シュラーガーは芸術作品としての初歩的資格を喪失するのである。

われわれは、民謡とシュラーガーを比較することによって、シュラーガーのこの性格をみることができであろう。以下にわれわれは、まずそれぞれの種の恋歌 *Liebeslied* を比較することによって、具体的にシュラーガーの性質把握にせまってみよう。

民謡: **i**)⁹⁾ Kein ^(イ)Feuer, keine ^(ロ)Kohle
Kann ^(ハ)brennen so heiß,
Als heimliche Liebe,
Von der Niemand nichts weiß.

(第2節以下省略)

ii)¹⁰⁾ Wenn alle ^(イ)Brünnlein ^(ロ)fließen,
So soll man ^(ハ)trinken.
Wenn ich mein Schatz nicht rufen darf
Ju ja, Rufen draf
Thu ich ihm winken.

(第2節以下省略)

iii)¹¹⁾ Wenn ich ein ^(イ)Vöglein ^(ロ)wär,
Und auch zwei ^(ハ)Flüglein hätt
^(*)Flög ich zu dir.
Weils aber nicht kann sein, ∴
Bleib ich bei dir.

(第2節以下省略)

民謡 **i**), **ii**), **iii**) において、それぞれ恋情を表現する媒介的素材として用いられているのが、以下の言葉である。

i): (イ) Feuer; (ロ) Kohle という自然物と、その
(ハ) brennen という姿。

ii): (イ) Brünnlein という自然物と、その
(ロ) fließen; (ハ) trinken という姿。

(iii): (イ) Vöglein; (ハ) Flüglein という自然物と、ich との関連における、(ロ) wär; (ニ) hätt; (ホ) flög という姿。

民謡 i, ii, iii)においては、恋情とその主体の形象は、これらの言葉によって一旦対象化され、恋情は各節の前半に凝縮・蓄積される。そして後半——意味の上の後半であって、ただ一行の最後の句であることもあり得る——にいたり、凝縮されていた恋情は一挙に解放される。

したがって、以下の句は、素材に即して具体的であらざるを得ない。また普遍的であらざるを得ず、はじめて美学的効果を以て恋情を表現する条件をそなえることになるのであろう。

i): Von der Niemand nichts weiß.

ii): 3行目 Wenn 以下。

iii): Weils aber nicht kann sein 以下。

シュラーガー: i)¹²⁾(イ)Wunderbar wie du,

(ロ)zauberhaft wie du,

kann doch keine andere sein.

Bitte schau mich an

sicher (ハ)fühlst du dann,

ich gehör nur dir allein.

(ニ)Schön ist mein Leben,

seit es dich gibt,

denn ich bin nun

endlich, endlich verliebt.

(ホ)Lächeln so wie du,

(ハ)zärtlich sein wie du,

kann keine andere glaube mir

und daß ich dich mag,

noch nach Jahr und Tag Liebling ja,

das (ト)schwör ich dir.

(以下省略)

ii)¹³⁾ Honey Moon, Honey Moon
 davon träumen wir schon heut Honey, Moon,
 Honey Moon ist des Lebens schönste Zeit.
 Liebling komm und schau mich an,
 dann gesteh ich dir,
 daß ^(イ)mein Herz vor Sehensucht sicher verbrennt,
 und geht es dir ebenso,
 dann gehörst du mir
 und es gibt für uns ein Habby-End.

(第二節以下省略)

iii)¹⁴⁾ Junge Leute brauchen Liebe,
 ohne Liebe kann doch keiner leben!
 Nicht erst heute ist das so das war so
 schon vor hundert Jahren.

Junge Leute brauchen Liebe
 und so lange es die Liebe gibt,
 bleib ich noch tausend Tage,
 tausendmal in dich verliebt.

^(イ)Romeo liebte einst ^(ロ)Julia,
 und ^(ハ)der Hans liebt heute seine ^(ニ)Monika;
 darum komm, küß mich!
 und sag nicht nein.

Dann bin ich dein,
 so war das auch schon vor hundert Jahren!

Junge Leute brauchen Liebe,
 und so lange es die Liebe gibt,
 bleib ich noch tausend Tage
 tausendmal in dich verliebt!

シュラーガー i)において、恋情の対象 du が、例えば(イ) wunderbar; (ロ) zauberhaft であることを、客観的に、他者に対して感知せしめる描写は存在するであろうか。同様に、(ホ) lächeln; (ヘ) zärtlich sein の客観的な描写は存在するであろうか。それらはいずれも欠除している。また(ニ) schön に

関しても、それは同じであり、(ハ) fühlen; (ト) schwören する主体の性格描写も全く欠除しているのである。ただそこには、対象化されない、そして普遍化されない、主観的感情の直接的・無媒介的吐露が存在するだけである。

ich gehör nur dir allein とか、
denn ich bin nun endlich, endlich verliebt とか、あるいは
noch nach Jahr und Tag Liebling ja,
das schwör ich dir

という主観的感情を、何十回繰返しても、それだけでは芸術的価値を獲得するには至らないであろう。

シュラーガー ii) においてはどうかであろうか。やはり i) と同様であろう。シュラーガー ii) の (イ) mein Herz vor Sehensucht sicher verbrennt は、民謡 i) にあつては、描写における客観的素材を用いて——(イ) Feuer; (ロ) Kohle——表現されている。ii) の (イ) は直接的・無媒介的である。

シュラーガー iii) に関してみれば、われわれは、僅かに、(イ) Romeo 対 (ロ) Julia に、(ハ) der Hans 対 (ニ) Monika を対比することによって、恋愛の客観的情景を想起し得はする。しかしこの対比は必然性を持ち得るであろうか。例えば悲劇ロメオとジュリエット («Romeo and Juliet», 1594-95) は、ロメオとジュリエットの相思相愛と彼等を隔絶する周辺との矛盾、すなわち彼等にとっては克服不能な矛盾、これを彼等が死によって解決せざるを得なかった必然的・客観的過程を描写することによって、近代的人間像の出現と封建の家族制度乃至封建制度一般の崩壊を予告している。これが一般的理解である。シュラーガー iii) における (イ), (ロ) 対 (ハ), (ニ) の対比は、すなわち、

Romeo liebte einst Julia と
der Hans liebt heute seine Monika

の句は何等の関係も内容的にはもたないであろう。

(イ) Romeo; (ロ) Julia; (ハ) der Hans; (ニ) Monika などの素材は、このシュラーガーに用いられるのではなく、適切な用いられ方の中に生かされる

ならば, Romeo 対 Julia や der Hans 対 Monika は、客観性をもった、それ自体完結した恋愛物語として成り立つのである。しかし、このシュラーガーにあっては、上述の如く、何等の関係がないということにとどまらず、素材の客観性の破壊を招く。例えばこの二句, Romeo liebte einst Julia と der Hans liebt heute seine Monika は、次に続く句

darum komm, küß mich!
und sag nicht nein.

の, darum という一語によって, komm, küß mich! という句のための, 全く偶然的・恣意的な素材に転化するのである。

素材を自由に用い得ること Verfügbarkeit 自体は, シュラーガーにおいても他のジャンルの作品においても, 全く同様である¹⁵⁾。この素材を用いる場合に, シュラーガーにあっては, いまわれわれがみた如く, 素材の客観性は破壊される。

いまわれわれがみた, 民謡とシュラーガーの相違をいま少し拡大された視野でみてみよう。そのために, 民謡とシュラーガーの歌詞内容を, 実際の事件, あるいは生活事実との結合 Binndung¹⁶⁾ において検討してみよう。

民謡に比較した場合, シュラーガーにあっては, それが顕著に弛緩していることをみいだすことができよう。

民謡: iv)¹⁷⁾ Als wir jüngst in ⁽ⁱ⁾Regensburg waren,
Sind wir über den Strudel gefahren,
Da waren viele Holden,
Die mitfahren wollten:
⁽⁼⁾Scwäbische, ^(v)bayrische Dirndel, juche!
Muß der Schiffman führen.

(第2節以下省略)

v)¹⁸⁾ O ⁽ⁱ⁾ Straßburg, o ⁽ⁱ⁾ Straßburg,
Du wunderschöne Stadt,
Darinnen liegt begraben
So mannischer Soldat.

(第2節以下省略)

vi)¹⁹⁾ Prinz Eugenius, der edle Ritter,
 Wollt' dem Kaiser wiederum kriegen
 Stadt und Festung ⁽¹⁾Belgard.
 Er ließ schlagen einen Brucken,
 Daß man kunnt' hinüber rucken
 Mit d'r Armee wohl für die Stadt.

(第2節以下省略)

民謡 iv) は旅の歌 Wanderlieder, v) は職業歌 Ständelieder の中の兵士の歌 Soldatenlieder, vi) は歴史歌 Historische Lieder である。

民謡 iv) においては、(イ) Regensburg という地名が歌われている。この民謡は、人々がドーナウ (Donau) 河畔のその地において、(ロ) schwäbisch; (ハ) bayrisch の娘達とともに急流の渡しを渡ったという、体験の歌 Erlebnislied である。(この民謡は、第2節以下において、次第に Ballade のもつ叙事詩的要素を増してき、したがって、地名よりは事実を物語るものであるが、当面第一節のみをみることにする。) この歌は体験の歌とはいえ、一回限りの体験を語るのではなく、(イ) Regensburg は変化し、Algen になつたりして、民謡のヴァリエーションとしての多様性を示す。しかし地名の変化は、民謡としての特性を損うものではなく、Algen になれば、その地の同様な体験を語る民謡となるのである。

民謡 v) における (イ) Straßburg も上と同様——体験とはいえませんが——、実際の出来事の舞台としての具体性をもっている。これもヴァリエーションが存在する。

民謡 vi) における (イ) Belgrad は、オーストリアがトルコ軍を撃破した史実、ベルグラードの会戦 (1717) の舞台としての具体性をもっている。

シュラーガー: iv)²⁰⁾(1) Kanada—kennst du ⁽¹⁾Kanada?
 Jatz in Kanada—das wär schön!
⁽²⁾Mexiko—kennst du Mexiko?
 Einmal ⁽²⁾Mexiko möcht ich sehn!
 Feuerland und Südseestrand?
 Wie die Sterne mich lenken
 —doch Tag für Tag,

wenn ich fern dir bin,
 werd' ich daran denken:
 Irgendwann—irgendwann
 gibt's ein Wiederseh'n.
 (ハ)Irgendwo auf der großen Weit.
 Du weißt doch:
 Irgendwann muß ein Schiff mal
 vor Anker geh'n.
 Irgendwann—gibt's ein Wiederseh'n!

v)²¹⁾ Seeman, laß das Träumen,
 denkt nicht an Zuhause, Seemann,
 Wind und Wellen rufen dich hinaus.
 Deine Heimat ist das Meer,
 deine Freunde sind die Sterne,
 über (イ)Rio und (ロ)Schanghai,
 über (ハ)Bali und (ニ)Hawai,
 Deine Liebe ist dein Schiff,
 deine Sehnsucht ist die Ferne.

(以下省略)

vi)²¹⁾ Merci Monpti, auf Wiedersehen,
 die Zeit mit dir war wunderschön.

 Es war in (イ)Paris vor einem Cafe,
 da sagten wir zwei uns Adieu.
 Ich drehte mich um und sah einen Blick.
 dann rief ich dich wieder zurück.

(以下省略)

シュラーガー iv) は恋歌, v) は職業歌にあたる船乗りの歌 Seemannslied,
 vi) は恋歌である。

シュラーガー iv) においては、その主題と最も緊密に結合した空間的表象
 は、決してあれこれの地名ではなく、(ハ) irgendwo であろう。(イ) Kanada;
 (ロ) Mexiko は、その地の具体的背景の描写の中や、物語の筋の展開過程に

不可避的に嵌込まれた地名ではあり得ない。民謡の地名が、すべて生活的に親しまれた圏内 vertrauter Kreis²³⁾ に結びついているのに対し、シュラーガーでは、基本的に、irgendwo が空間的表象となっている。シュラーガーの地名は不確定である。(イ) Kanada; (ロ) Mexiko は、空想的に想定された偶然的素材なのである²⁴⁾。

シュラーガー v) には、(イ) Rio; (ロ) Schanghai; (ハ) Bali; (ニ) Hawai の地名が用いられている。この地名に関しても、シュラーガー vi) の地名と同様なことがいえるであろう。

いまかりに民謡の船乗りの歌²⁵⁾ をみるとどうであろうか。

(1, 2, 3 節省略)

Kommen wir nach ^(イ)Engelland,
Ist Matrosen wohlbekannt.
Kehren wir zur Stadt hinein
Wo die schönen Mädchen fein,
Und man führt uns hübsch und fein.

Kommen wir nach ^(ロ)Amerika,
Schöne Mädchen giebts auch da
Sie reichen freundlich uns die Hand:
„Seid willkommen im fremden Land
Und gesund am Meeresstrand!“

(第6節以下省略)

この歌は1880年頃うたわれていた汽帆船(この時代には汽帆船はすでに主役の座をおりたが)の水夫の歌で、(イ) Engelland (イギリス); (ロ) Amerika は彼等の生活領域に属している。

シュラーガー v) における地名は、現代の発達した交通機関の能力からすれば、現代の生活領域の範囲に含まれるであろう²⁶⁾。しかし、シュラーガーを支配する基本的情緒には、

deine Sehnsucht ist die Ferne

という句の示すごとく、要するに遠隔の地であって²⁷⁾、特定の地理的な名前

を求める必然性はない。Ferne を示す地名であれば、何であっても用いることができるのである。

シュラーガー **vi**) には、(イ) Paris が地名として用いられている。Merci~Paris の呼応関係も、一連の他国語とその国の地名に置き換えることによっても、このシュラーガーは成り立つのである。

さて、われわれは、シュラーガー **i**)~**vi**) を通じて、共通な用語上の特徴をみつけることができる。

夢 Traum (**v**); 夢みる träumen (**i**); 憧憬 Sehnsucht (**ii, v**); かなた Ferne (**v**); 遠くはなれた fern (**iv**); 何時の時か irgendwann (**vi**); 何処かの地で irgendwo (**vi**) などの言葉は、シュラーガーにとって不可欠の用語と思われるのである。シュラーガーの歌詞にみられる、これらの不確定な、非現実的なかなたへの逃避感情と、Kanada; Mexiko; Rio; Schanghai; Bali; Hawai; Paris などの偶然的な地名が結びついているのである。これらの地名は、歌唱者に対し単に Exotisch な観念²⁸⁾ を表象させているに過ぎない。

ヴァルター・ヴィオラは、民謡の時代の人間は、Vollmenschlichkeit を持っているとして述べている²⁹⁾ が、これは、自分の周囲・環境との十分な調和をもって活動する人間にそなわる性質である。人は民謡においては、「外部の事態や現象に自己を反映させる」³⁰⁾ やり方で自分の心情を表現するが、この「外部」は、自分と調和を保っている、すなわち、自分の安定した生活領域となっている環境である。

しかし、シュラーガーにおいては、歌詞に用いられる用語からみれば、この調和は存在しない。シュラーガー時代の人間は、はるかかなたへの逃避を願望しているのである。

もちろん、「種々様々な民謡は、一種の憧憬的な傾向を有し、外面的な表徴のうちには神秘的な無言の憧憬や痛苦を暗示している」³¹⁾。この点はシュラーガーも同様ではある。しかし、上述の如きその「外面的な表徴」の相違を通じて、われわれはシュラーガーの時代には、人々の安定した生活領域がすでに存在しないことを感知することができるのである。シュラーガーは、現代

のこの情況の反映でもある。

われわれをはじめに、シュラーガーが kurzlebig であることを考えた。これは、単にシュラーガーを伝達する発達した技術的手段や現代娯楽産業の歌の販売の速さや量によるばかりではなく、歌自体の内的性格と、それを享受する大衆的基盤の性質にもよることが以上の考察を通じて了解される。

註) II.

- 1) 『民衆音楽誌』(«Volksmusik», 1-3, 1967) 1 Bd., S. 6-7, 3 Bd., S. 8-9.
- 2) ハインリヒ・ゼーマン (Heinrich Seemann) 『民謡と著作権』(«Volklied und Urheberrecht». Diss. Freiburg 1965).
- 3) ヴォルフガング・ズッパン (Wolfgang Suppan), 『民謡』(«Volklied». Stuttgart 1965) S. 53 f.
- 4) 『音楽上の時事問題』(«Musikalische Zeitfragen». VII. Das Volkslied Heute, Kassel 1959) S. 23.
- 5) ヘルマン・パウズインガー (Hermann Bausinger), 『民謡とシュラーガー』(«Volklied und Schlager», Im: Jahrbuch des österreichischen Volksliedwerkes, 5, 1956), S. 59-76. 本稿はこの論文の着眼に多く負っている。其他 ズィークフリート・アーベル・シュトルト (Sigtrid Abel-struth) 『民謡とシュラーガー、歌詞の比較』(«Volklied und Schlager, ein Textvergleich», In: Kontakte 4, Wolfenbüttel 1958) S. 160-164.; 同 『民謡とシュラーガーの比較』(«Volklied contra Schlager». In: Musik im Unterricht 47, Mainz 1957, S. 318-320.
- 6) K. ロイシェル (K. Reuschel), 『民俗学散歩』(«Volkskundliche Streifzüge», Dresden u. Leipzig 1903) S. 54 f.
アルフレート・ゲッツェ (Alfred Götze), 『ドイツ民謡』(«Das deutsche Volkslied», Leipzig 1929) S. 26 f.
H. パウズインガー ibid., S. 56.
- 7) ハイント・シリング (Heinz Schilling), 『シュラーガー研究によせて』(«Zur Erforschung des Schlagers», In: Zeitschrift für Volkskunde. 63. Jahrgang 1967 I) S. 75. 5) との関連で考えなければならないが、エルンスト・クルーゼン (Ernst Klusen) は、「新しい概念装置」(Ein neues Begriffsinstrumentarium), In: Zeitschrift für Volkskunde, 63. Jahrgang 1967, S. 51-53 において、こういう比較に反対している。
- 8) この概念は非常に広く、ここで特に指摘しておかなければならないのは、特に最近の研究課題となっている「流行歌」Modelied である。この訳語は正しく内容を示していないが暫定的に用いる。
インゲボルク・ヴェーバー・ケラーマン (Ingeborg Weer-Kellermann), 『流行と伝統』

(«Mode und Tradition», In: *Dopulus revisus*, Tübingen 1966) S. 17-26, 特に S. 22 f.

ヒンリヒ・スイツ (Hinrich Siuts), 『ドイツの民間歌謡における民謡と流行の歌謡の関係』 («Das Verhältnis von Volkslied und Modelied im deutschen Volks-gesang», In: *Jahrbuch für Volksliedforschung*, 12, 1967).

また巷の歌として Gassenlied もこの概念の中に含まれる。Modelied と Gassenlied, それらと Schlager の概念の相違については、別の機会にあつかう。

- 9) エルク・ベーム (Erk Böhme), 『ドイツ民謡集』 («Deutscher Liederhort», Neuauflage Hildesheim 1963, II) S. 325-327. —以下同書を EB と略す。この歌は、1807年、ピュツシング及びハーゲン (Büching und von der Hagen) の『ドイツ民謡集』 («Deutsche Volkslieder», 1807) にはじめて掲載され、フリードリッヒ・ズイルヒャー (Friedrich Silcher) の手を経て、広域な伝播をした。最初の句 *Kein Feuer, Keine Konle* は移動詩節 *Wanderstrophe* として有名である。
- 10) EB II, S. 247-251, Nr. 429^b, S. 249. 本歌詞は、オーデンヴァルト (Odenwald) 地域一帯の19世紀中葉の口承より記載された。この歌はヴァリアンテが多く、(イ) *Wenn alle Bächlein~*; (ロ) *Wenn alle Wässerlein~*; (ハ) *Weun all Bäche~*; (ニ) *Wenn all die Bächlein~*; (ホ) *Die Brunnlein, die da fließen*; (ヘ) *Und in dem Schneegebirge da fließt ein Brunnlein kalt* など、第1節第1句をみてもさまざまである。この歌は古く、EBに、例えば(ヘ)を評してこう述べてある: „Hier in den drei ersten Strophen noch deutliche Nachklänge des vor 400 Jahren gesungenen Wundergartenliedes mit seinen Jungbrunnen“.
- 11) EB II. 333-S. 335, 本歌詞は Nr. 512^a, S. 333. この歌ははじめヘルダー (Johann Gottfried von Herder) の『歌謡における諸国民の声』 («*Stimmen der Völker in Liedern*» I, Leipzig 1718) S. 67 に掲載され、以後広域に伝播した。ヘルダーの掲載したものと全く異なるヴァリアンテも存在するが、その第1節は互いに非常に似ている。EBではこの歌に「愛の飛翔」(*Flug der Liebe*) と題し、この歌のもとの歌も「恋の歌」*Liebeslied* とされている。原俊彦, 『ドイツ民謡選』, 三修社 1965, S. 97 にも「珠玉のような恋愛歌で……」とある。中村耕平・志田麓『ドイツ民謡珠玉集』 (*Volksliederschatz*), 南江堂 7 Auflage 1967, S. 45 には「母への思慕」(*Sehensucht nach der Mutter*) の歌だとあるが、納得できない。
- 12) ヘルマン・フィツシャー (Hermann Fischer), 『民謡, シュラーガー, エヴァーグリーン』 («*Volkslied, Schager, Evergreen*», Tübingen 1965, S. 175-180 の同書付録の *Schlagerheft* より転載。本歌詞は Nr. 2, S. 175, 作詩者は P. クラウス (P. Klaus)。
- 13) *ibid.*, S. 176. 本歌詞は Nr. 4, 作詩者は P. クラウス (P. Klaus)。
- 14) *ibid.*, S. 176. 本歌詞は Nr. 15, 作詩者は不詳。

- 15) H. フィッシャー, *ibid.*, S. 43, この Verfügbarkeit は, 空間的延長と同時に時間的延長においてなされる。
- 16) ヴァルター・ヴィオラ (Walter Wiora) 『きつすいの民謡』(«Das echte Volkslied», 2 Auflage, Heidelberg 1962, S. 63 f., „Das Volkslied ist weitgehend an Bräuche und Zeitpunkte des Tages und Jahres gebunden, an Tradition und Sitten, an kollektive Gewohnheiten, die wenig Spielraum für Übertretung lassen.“ しかし, ここではそれを全面的に検討するのではない。地名と事件に限定する。
Bindung の概念を定式化したのは, レオポルド・シュミット (Leopold Schmidt) 『民俗学における民謡概念』(«Der Volksliedbegriff in der Volkskunde», In: Das deutsche Volkslied, 38. Jahrgang 1936) 73-75.
- 17) EB I, 459- 460, 同じ趣旨でありつつ歌詞が少しずつ異なるヴァリエーション (Bayern) 地方に伝わっていた。そして, その地その地に応じて, 地名も多様である。地名のかわりに Au (牧場) とか, Wald (森) になったりもする。
- 18) EB III, S. 259-S. 260, この歌は 18 世紀末にシュヴァーベン (Schwaben) で作詞された兵士の歌であり, さまざまなヴァリエーションが存在する。
- 19) EB II, 134-S. 135, 歌詞は従軍した一兵士の作といわれ, 1717 年のあるピラ Flugblatt に掲載されたのをきっかけに伝播した。ピラはなくなったが, エルラッハ (Freiherr von Erlach) の『ドイツ民謡集』(«Die Volkslieder der Deutschen», Mannheim 1834, II), S. 245 などに掲載された。
イルマ・ヒフト (Irma Hift) 『オイゲン公の古歌』(«Das alte Lied vom Prinz Eugen», In: Zeitschrift für österreichische Volkskunde 20, 1914, S. 157-S. 160); O. レードリヒ及び V. ユンク (O. Redlich und V. Junk) 『オイゲン公の歌』(«Das Lied vom Prinz Eugen», In: Anzeiger der Akademie der Wissenschaften Wien, Philosophische und historische Klasse, Jahrgang 1934, Nr. I-V, S. 17-32); ハンス・ヨアヒム・モーザー (Hans Joachim Moser) 『歌謡におけるオイゲン公』(«Prinz Eugen im Lied», In: Germanien 12, 1940, S. 163-167); ヘルムート・オェラー (Helmut Oehler) 『歌謡とピラにおけるオイゲン公』(«Prinz Eegen im Volkslied und Flugschrift», Gießen 1941); 同『オイゲン公に対するヨーロッパの判決。詩と歴史記述における英雄伝説とその廃棄』(«Prinz Eugen im Urteil Europas. Ein Mythos und sein Niederschlag in Dichtung und Geschichtsschreibung», München 1944).
- 20) H. フィッシャー, *ibid.*, S. 180, Nr. 20, 作詞者はフレディー・クイン (Freddy Quinn).
- 21) *ibid.*, S. 175, Nr. 17, 作詞者はロリータ (Lolita)。
- 22) *ibid.*, S. 176, Nr. 7, 作詞者はロミー・シュナイダー (Romy Schenider)。
- 23) H. パウズィンガー, *ibid.*, S. 72, „Alle Erfahrung des Fremden doch wieder

- auf den vertrauten Kreis ... bezogen wird.“
- 24) H. フィッシャー, *ibid.*, S. 42, „Hawai, Adano, Piräus, Capri, der grüne Nil, die Südsee und die Prärie sind keine Orte und Landschaften, die mit einer geographischen Vorstellung verbunden sind.“
- 25) EB III, S. 352-353, ラーン (Lahn) 地方で 1885 年記載された。
- 26) H. バウズィンガー 『技術社会の民俗文化』(«Volkskultur in der technischen Welt». Stuttgart 1961).
- 27) H. フィッシャー, *ibid.*, S. 43, „... daß die meisten Schlager das Land besinnen, das jeweils durch Verkehrsbüro und Fremdenwerbung zum allgemeinen Reiseland auserkoren werde.“
- 28) H. バウズィンガー, *ibid.*, S. 76.
- 29) W. ヴィオラ, *ibid.*, S. 61.
- 30) 竹内敏雄訳, ヘーゲル 『美学』第一巻の下, 岩波書店 1967, S. 695.
- 31) *ibid.*

III. 結び——シュラーガー研究の現状

シュラーガー研究は、ここ十数年の細々とした歴史をもっているのにすぎない。シュラーガー研究は、民謡研究の発展のたまものである。

第二次大戦前確立された、ジョン・マイアー (John Meier) の民謡研究の文献学的方法¹⁾をのりこえようとする、第二次大戦後の研究は、より広範な多様な歌唱現象に着目し、歌の担い手・歌唱者の社会学的把握を媒介²⁾にして、それらの歌唱現象を統一的に理解しようという傾向を示している。こうした観点は、ヘルマン・バウズィンガー (Hermann Bausinger)³⁾、エルンスト・クルーゼン (Ernst Klusen)⁴⁾、ヒンリヒ・スイツツ (Hinrich Siuts)⁵⁾、インゲボルク・ヴェーバー・ケラーマン (Ingeborg Weber-Kellermann)⁶⁾、ドーリス・シュトックマン (Doris Stockmann)⁷⁾ などの人々が提供している。これらの人々にみられる共通の現象は、民謡 *Volkslied* という用語を、より拡大された概念、*Modelied*, *Gassenlied*, *Gassenhauer*, *Schnulze*, *Couple*, *Evergreen*, *Benkelgesang* としてももちろん *Schlager* などの歌をふくめた、*Gruppenlied*⁸⁾ とか、*Volksgesang*⁹⁾ とかの新しい用語でおきかえようとする傾向である。しかし、まだそれは試みの段階として、今後の研究を必要としている。

とにかく、このような背景をひかえつつ、シュラーガー研究もなされてきている。ハインツ・シリング (Heinz Schilling) は、1967年の段階にいたるシュラーガー研究の現状を示す文献を非常に適切に挙示しているので¹⁰⁾、そこから一部をのぞき、本稿の筆者が重要とみなす部分をここに引用する。

H. シリングによれば、シュラーガー研究の文献は、(イ) 通俗的な仕事 (populärwissenschaftliche Arbeit) と (ロ) 学問的な仕事 (wissenschaftliche Arbeit) にわかれる。

(イ) 1953: フランツ・バール (Franz Bahr), 『詩とシュラーガー』 («Gedicht und Schlager», In: Frankfurter Hefte 1/1953, S. 44-47).

1954: ハンス・ヴァイゲル (Hans Weigel), 『シュラーガーの形而上学によせて』 («Zur Metaphysik des Schlagers», In: Die Neue Zeitung. 3. 10. 1954).

レーオンハルト A. パリース (Leonhard A. Paris), 『人とメロディー』 («Men and Melodies», New York 1954).

フリードリヒ・キーネッカー (Friedrich Kienecker), 『シュラーガー. その世界像と危害』 («Der Schlager. Sein Weltbild und seine Gefahr», In: Die Kirche in der Welt. 25/1954, S. 123-137).

1955: E. A. フランツ (E. A. Franz), 『シュラーガーの歌詞をどう書くか. その手引』 («Wie schreibt man Schlagertexte. Ein Leitfaden», Bayreuth 1955).

ウィリー・シュラー (Willy Nchtüller), 『シュラーガーの歌詞における, 真面目な, 人間的な証言』 («Ehrliche, menschliche Aussage im Schlagertext», In: Musik und Gesellschaft. Bd. 4. Berlin 1955, S. 118/19).

ハンス・エーゴン・ホトゥーゼン (Hans Egon Hothusen), 『一時的な音楽とわれわれの存在』 («Die flüchtige Musik der Saison und unsere Existenz», In: Universitas 8/1955, S. 929-

S. 932).

1957: ヴァルター・ハース (Walter Haas), 『シュラーガー集』 («Das Schlagerbuch», München 1957).

1958: ヴォルフガング・シュトゥンメ (Wolfgang Stumme) 『シュヌルツェの勝利』 («Triumph der Schnulze», In: Kontakte 4/1958, S. 151-157).

ヨーアヒム・シュターヴェ (Yoachim Stave), 『シュヌルツェ一言語的観察』 («Schnulze-sprachlich gesehen», In: Kontakte 4/1958, S. 158-160).

ズィークリド・アーベーシュトルート (Sigrid Abe-Struth), 『民謡とシュラーガー. 歌詞の比較』 («Volkslied und Schlager. Ein Textvergleich», In: Kontakte 4/1958, S. 160-164).

ヴィルヘルム・トヴィツテンホッフ (Wilhelm Twitteuhoff), 『悲しい時には歌を歌え. シュラーガーの哲学によせて』 («Sing ein Lied, wenn Du mal traurig bist. Zur Philosophie des Schlagers», In: Kontakte 4/1958, S. 165-168).

ディーター・ハツセルブラット (Dieter Hasselblatt), 『夢のボートと馬の鞍. シュラーガー覚え書き』 («Traumboot und Pferdehalfter. Notizen um Schlager», In: Neue Zeitschrift für Musik 1958, S. 503-506).

ディーター・ゲルトシュレーガー (Dieter Geldschläger), 『シュラーガーの歌詞の哲学』 («Philosophie der Schlägertextes», In: Der Tanz in der modernen Gesellschaft», Hamburg 1958, S. 107-124).

1959: ヴァルター・ハース (Walter Haas), 『主人公の声』 («Die Stimme seines Herrn», Frankfurt/M. 1959).

フリードリヒ・ヘルツフェルト (Friedrich Herzfeld) 『音楽に関するすべて』 («Alles über Musik», Mainz 1959).

- 1960: ズイクフリート・シュミット-ヨース (Siegfried Schmitt-Yoos), 『シュラーガーによる営業』 («Geschäfte mit Schlager», Bremen 1960).
- ギュンター・ヘーゲレ (Günter Hegele), 『心の糧としてのシュラーガー』 («Schlager als Seelenspeise», In: fonoform 5/1960, S. 26 ff.).
- イナ・フォン・ボエツティヒャー (Ina von Boetticher), 『シュラーガーの言明するもの』 («Was Schlager aussagen», In: Sozialpädagogik, 2. Jahrgang Gütersloh 1960, S. 85-87). ヘルマン・シュライバー (Hermann Schreiber), 『楽曲による生の虚偽. 何故シュヌルツェとシュヌルツェは同じものでないか』 («Lebenslüge nach Noten. Warum Schnulze und Schnulze nicht dasselbe sind», In: Der Monat Nr. 138, 1960, S. 67-S. 68).
- 1962: ヴィルフリード・ベルクハーン (Wilfried Berghahn), 『異国のなかに. ドイツのシュラーガーの社会・心理学的覚え書き』 («In der Fremde. Sozial-Psychologische Notizen zum deutschen Schlager», In: Frankfurter Hefte 3/1962, S. 193-202).
- ディーター・ハーゼルブラット (Dieter Haselblatt), 『冷たき歓声. 包装資材としてのシュラーガー』 («Eiskalter Jubel. Schlager als Verpackungsmaterial», In: Frankfurter Allgemeine Zeitung. 19. 5. 1962).
- 1963: ゲオルク・グロース (Georg Groos) 『シュラーガーは, 特にそのために発見された綱目の, 組織的な濫用である』 («Der Schlager ist der organisierte Mißbrauch einer eigens zu diegem Zweck erfundenen Masche», In: Christ und Welt 23/1963) 『シュラーガー製作者のカルテル』 («Das Kartel der Schlagermacher», In: Der Spiegel 40/1963, S. 95-110.

- ハンス・クリストーフ・ウォーブス (Hans Christoph Worbs), 『シュラーガー. 蒐集, 分析, 記録』 («Der Schlager. Bestandsaufnahme, Analyse, Dokumentation», Bremen 1963).
- 1965: カール・リーハ (Karl Riha), 『モリタート, 歌謡: ベンケルザング 現代のバラードの歴史によせて』 («Moritat, Song: Bekelsang. Zur Geschichte der modernen Ballade», Göttingen 1965)
- フランツ・バール (Franz Bahl), 『詩とシュラーガー』 («Gedicht und Schlager», In: Hessischer Rundfunk. Schulfunk: Winterprogram 1965/66. Deutsch/Literatur, S. 20-25).
- 1966: ヴィンリヒ・フロッシュ (Winrich Frosch), 『シュヌルツェのレコード版』 («Schnulzenscheibenweise», In: Frankfurter Rundschau. 22. 1. 1966).
- (ロ) 1956: ヘルマン・バウズィンガー (Hermann Bausinger), 『民謡とシュラーガー』 («Volkslied und Schlager», In: Jahrbuch des österreichischen Volksliedwerkes Bd. 5, Wien 1956, S. 59-76).
- 1957: エルゼ・ハウプト (Else Haupt), 『民謡との比較におけるドイツのシュラーガーの文体論的・言語学的研究』 («Stil-und sprachkundliche Untersuchungen zum deutschen Schlager unter besonderer Berücksichtigung des Vergleichs mit dem Volkslied», Phil. Diss. München 1957).
- 1961: フリッツ・バッハママン (Fritz Bachmann), 『歌曲, シュラーガー, シュヌルツェ』 («Lied, Schlager, Schnulze», Leipzig 1961).
- 1962: ローベルト・ライヒハルト (Robert Reichhardt), 『文化的・経済的現象としてのレコード』 («Schallplatte als Kulturelles und ökonomisches Phänomen», Phil. Diss. Basel 1962).
- 1964: ルネ・マラムート (René Malamud), 『ドイツのシュラーガーの心理学によせて』 («Zur Psychologie des deutschen Schlagers»,

Wintertur 1964).

1965: ヘルマン・フィッシャー (Hermann Fischer) 『民謡, シュラー
 ガー, エヴァグリーン』(«Volkslied, Schlager, Evergreen.
 Studien über das lebendige Singen aufgrund von Unter-
 suchungen im Kreis Reutlingen», Phil. Diss. Tübingen 1965).

以上が、戦後のシュラーガー研究の主な仕事である。毎年ドイツで生産さ
 れる民俗学(民謡, 歌謡研究一般を含め)の論文は大小約二千編を越えるのであ
 り、そのうち民謡, 歌謡研究一般も数十編に達する。その中で、シュラーガー
 研究は非常に少なく、平均すれば二年乃至三年に一乃至二論文であって、多
 面的な研究の蓄積は将来に託されている。(昭46. 3. 24 受理)

註) III.

- 1) J. マイアーの業績目録、並びに著作に対する書評目録は、『民謡研究年報』(«Jahrbuch für Volksliedforschung», 14. Jahrgang. 1969).
- 2) 民俗学における社会学的方法の導入の由来と経過に関しては、インゲボルク・ヴェーバーケラーマン (Ingeborg Weber-Kellermann) 『ドイツ学と社会科学の間にある民俗学』(«Volkskunde zwischen Germanistik und Sozialwissenschaft».)
- 3) H. バウズィンガー, (註) I. 16), II. 26) の他に、『民衆詩の詩形態』(«Formen der Volks poesie», Berlin 1968).
- 4) E. クルーゼン, (註) II. 7) の他に、『ドイツ民謡』(«Deutsche Volkslieder», Köln 1968).
- 5) H. スィウツ, (註) II. 8) の他に、その論文のより基本的な思想は同題の講演、『ドイツの民間歌謡における民謡と流行歌との関係』(«Das Verhältnis von Volkslied und Modelied im deutschen Volksgesang», Antrittsvorlesung im SS 1966). 民間歌謡 Volksgesang は暫定訳。
- 6) I. ヴェパー・ケラーマン, (註) II. 8).
- 7) D. シェトックマン, 『アルトマルクトの民間歌謡』(«Volksgesang in Altmarkt», Berlin 1962).
- 8) 4) 参照。
- 9) 7) 参照。
- 10) ドイツ民俗学会論: 『民俗学雑誌』(«Zeitschrift für Volkskunde», 63. Jahrgang. 1971 I, S. 76-78).